

研究課題	児童文学および子どものためのコンダクト・ブックにおける 道徳的教訓とジェンダー規範について
研究代表者	伊藤 淑子 (文学部人文学科 教授)

① 研究の目的

本研究は昨年度に継続し、19世紀の子ども向けの出版物から、ジェンダー規範や理想の子ども像の形成の過程を探りだすことを目的としている。ヴィクトリアン・アメリカンにおいて、子どもの教育に対する女性の役割はきわめて大きくなる。母親として次世代の市民を育てることは女性の重要な働きの一つであると社会も女性自身も認識するようになる。その一方で、女性の権利運動がしだいにひろがって行った時代でもある。母親としての社会の期待が女性に向けられるとともに、人間としての人権意識に女性が目覚めるという表面的には相反するドライブが働いた時代に、児童書はどのようなジェンダー規範、市民意識を子どもに植えつけようとしたのか、そして、その価値観は今にいたるまでどのような影響を持ち続けているのか、を分析することが本研究の目的である。子どものための読み物は少年少女それぞれに向けて書かれているが、とくに、社会による役割規定と役割規定からの解放という二つのはざまに置かれた少女たちに、どのような指針が与えられたのかを検証し、個人の権利をめぐる意識の変化と子ども観の変容を、子どものための物語や作法書から探る。

② 研究の経過

ジェンダーをめぐる議論にはつねに二つの方向性が働いている。一つは、「あるべき」姿を構築しようという方向であり、もう一つは「あるべき」とされるものからの解放、あるいは「あるべき」ものの解体の試みである。本研究は19世紀アメリカを中心に、前者を教訓的児童文学、こどものためのコンダクト・ブックの言説、後者を女性の権利運動の展開に見つけられると仮定している。アメリカの国家的なシステムが形成される時期に、どのようなジェンダーの議論が展開し、それがその時代に生きる人びとにいかなるガイドラインとなったか、矛盾を孕みつつ、どのような規範

が形成されたか、女性運動の浸透とジェンダー規範の構築の双方から分析しようと試みた。

現代における文化研究において、ジェンダーという視点は不可欠である。にもかかわらずジェンダー研究にはあいまいさや矛盾がつきまとうとしてその議論を排斥したり、急進的で反体制的であるという負のレッテルを張る動きも根強くある。

ジェンダーをめぐる議論が常に両義的であるのは、近代パラダイムの形成においてジェンダーが女性の人権確立にプラスとマイナスのはたらきを同時に果たしたことに起因すると考える。女性が尊厳ある存在として認められるために、文化的装置としてジェンダー規範の果たす役割は大きいといえるが、それは同時に女性に固定的な役割を強要することにもなる。規範としてのジェンダー意識と、近代の個人の概念の亀裂から、ジェンダーをめぐる議論のスタンスの多様性は生まれる。

しかしジェンダー規範への恭順と対抗という、表面的には相反するものの根本には、共通して、安定した個の場を築くという動機に支えられた言説的格闘があったことを本研究では確かめてきた。受け入れられるためには社会規範に従って発言し表現することが必要であるが、そのことが個人の権利を自ら否定することにもつながるのが下位に置かれたジェンダーを担う者の宿命でもある。社会規範を無視して個の主張を女性がすれば、たちまち社会からの排斥を受けることにもなる。そのような状況のなかで、少女は明るく快活にふるまうことを期待され、同時に謙虚で従順であることも求められたのである。個人として存在することを否が応でも引き受けなければならない近代以降の時代において、ジェンダー規範に依存することと、それを拒否することのあいだにあるものは、男性であることを基準とする社会を女性が生きるときに引き受けざるをえない矛盾であるといえる。

19世紀アメリカのフェミニズムの動向と、文学的にはあまり高い評価を受けてこなかった教訓的児童文学、子どものための作法書、キリスト教会の日曜学校のテキストなどをあわせて、ジェンダーの言説を共時

的に分析していく過程で驚かされるのは、少女にふりかかる不幸のおびただしさである。子どものために書かれた文学や作法書には、その社会が期待する理想的な子ども像が映し出されていると考えられるが、少女たちは数々の不運に耐え、それでも生きる希望を見失わず、たとえ死を運命づけられても天国への希望を続け、地上に残る人の幸福を祈り続けることを社会から求められていた。

その期待は19世紀の社会に存在したことであり、現在とは無関係であるかといえば、そうではないことを現代の人気アニメや映画に見出すことは容易である。たくさん話題作が、19世紀の読み物において少女や女性に期待された「朗らかで優しい献身的な癒し」を発揮することを変わず求めている。

研究の対象としたのは19世紀に書かれた児童文学とコンダクト・ブックであるが、これらのなかに埋め込まれた教訓や規範は、現代においてもその影響力を失っていない。まず、現在流通している英米の読書教育のガイドブックを見てみると、新しい作品に交じって、現在においても子どものリーディングリストに19世紀の児童文学が多く含まれている。イギリスの児童文学では『不思議の国のアリス』『宝島』、アメリカ児童文学では『若草物語』『トム・ソーヤーの冒険』などは、子どもに与えられる物語のなかにならず含まれる作品であるが、それらは執筆されてからすでに100年も150年も経過している。そのあいだに世界の情勢、メディアの機能、人間関係のあり方も大きく変化していることは明確な事実であるが、子どもたちは過去の時代を生きた登場人物たちが繰り広げる冒険や出来事とおして感情的経験を積み重ねることを課されているのである。

その意味において19世紀の児童文学ならびに子どものための読み物を分析し、そこにある教訓とジェンダー規範を考察することは、現代の問題を考えることにほかならない。過去に書かれた物語を消費するのは、過去の子どもたちだけではない。現代の子どもたちもまた19世紀の物語を、読書教育という制度によって好むと好まざるとを問わず、いわば強制的に消費させられているといえるだろう。

今年度は昨年度分析してきた19世紀の子どものための読み物に加え、現在生み出され、消費されている物語の分析、また現在も読み続けられている19世紀の物語の検証を行った。ベストセラーとなったLouis Sachar, *Holes* や、Ann Brashers, *The Sisterhood of the Traveling Pants* などから、現在の子どもたちが課題図

書として手にする児童文学、大衆的な人気を得るディズニーの最近の長編アニメ作品などをメインの分析対象とした。

③ 研究の成果

19世紀的なジェンダー観は、1990年代、2000年代に執筆されたり制作された新しい作品にも色濃く反映されていると結論付けることができる。いま若者たちは社会制度的あるいは文化的な性をどのようにとらえているのだろうか。現代社会において切実な男女の差はないかのように見えるかもしれない。法的な男女平等の確立が進み、性による不平等を可視化することは、いまではなかなか困難なことであるともいえる。学生たちに尋ねると、直接差別を受けたり感じたりしたことはないというのが大半の答えである。

しかし「差はあっても不平等ではない」という彼らの感覚は、19世紀の子どもの読み物におけるジェンダー認識と、じつはよく似ている。啓蒙主義における個人の権利の概念の発見を経て、19世紀にかけて確立されていく近代の文化的パラダイムの形成において、男女間の不公平な差別が公に推奨されたことは、少なくとも英米においては一度もなかったといえるのではないだろうか。そのうえで、女性は参政権も財産権もない状態に置かれたのである。権利が与えられなくても女性は尊重されうる、という逆説的ロジックに支えられたジェンダーの不均衡、その論理的矛盾はいまも続いている。

19世紀の児童書のなかの少女像、少女像との比較においての少年像の数量化データとその分析は、また別の発表の機会を待ちたいが、この時代の理想的な少女の成長はオルcottの『若草物語』の主人公、ジョーが体現しているといえる。理知的で快活な少女は作家になることを夢見て都会にでるものの、原稿は売れず、失意のなかで実家に帰ってくる。どのように夢を抱いていようとも、ジョーの理想の女性像は主婦として父親の不在を守り、娘たちの成長を導く母親であることは物語のなかで一貫している。物語は一度もこの母親を否定せず、母親は「自主性のある」夫に従順な専業主婦である。毎日忙しいのは賃金労働に従事するためではなく、家事とボランティアのためで、経済的な観点では全く無力でありながら、家族の精神的な拠り所であり、この一家にとって父親の不在は致命的なことではない。

この母親像は今となっては時代遅れの古い女性のモ

ラルを映し出しているかといえば、このような女性の生き方はいまでもたくさんの物語において賞賛され続けている。たとえばディズニーが制作した『カールじいさんの空飛ぶ家』を見れば、ジョーのようなタイプの女性がいまでもジェンダー規範のなかに生きることが明確になる。カールは冒険好きの少女エリーと恋に落ちる。気弱で臆病なカールに比べて、エリーはあらゆることに勇気と自信を発揮する。しかしひとたび結婚すると、エリーは赤ちゃんの誕生を待ちわびる専業主婦に変貌するのである。映画はエリーの物語を冒頭の短い時間に手際よく終了させ、作品の中心に偏屈な老人になったカールを置く。その構成自体が、女性の役割は男性を勇気づけるためのものであり、結婚における妻の役割は夫の精神生活を正常に保つためにあるものであることを、否が応でも見ている者に印象付ける。

女性参政権運動、女性権利拡張運動、ウーマン・リブ、フェミニズム、などさまざまな呼び名を持つ女性運動も、男女共同参画という標語に飲み込まれ、ジェンダーの不均衡による不平等感はいよいよ縮小している。男らしさの規範も女らしさの規範も、抑圧的な力ではなく、自由選択に基づくライフスタイルの一つの指針であるにとらえられるようになったといえるのかもしれない。しかし、大衆に消費される文化において、19世紀に構築された近代的なジェンダーの規範はいまも生き続けていると結論付けざるをえないのではないだろうか。

19世紀の英語文化圏における児童文学におけるセクシュアリティとジェンダーの扱いにも注意を向けた。児童文学においてセクシュアリティが表面化されることは少ないが、ジェンダー規範にたいしてどのようなセクシュアリティのあり方が暗示されているかという点にも注目しながら、文献の読解とデータ化した。19世紀のアメリカの子どもたちに向けて書かれたコンダクト・ブックの主だったものは、現在 *A Collection of Conduct Books for Girls and Boys in 19th Century America* (アメリカ19世紀の少女・少年のためのコンダクト・ブック) として復刻出版されているが、これに収められた少女向けの作法書、少年向けの作法書における極端なセクシュアリティの排除は注目に値する。このようなコンダクト・ブックのなかでは、少女たちの恋愛感情はいっさい触れられない。児童文学においては少女の淡い恋心が描かれ、それを実らせて結婚し、主婦としての幸せを最終的に手に入れることができるのに対して、コンダクト・ブックにおける

少女は懲罰的ともいえる不幸に見舞われ、それに耐え抜いたときには神に許され天国に迎えられるという約束を手に入れることができるのである。

アメリカのコンダクト・ブックにはキリスト教を前面に押し出した教訓に満ちている。子どもたちは「少女」であることと「少年」であることを早期に意識することを期待され、少女は控えめで家庭的な存在になることを、少年は正義にあふれた勇敢な人物になることが教えられる。

19世紀に著された子どもの読み物を分析することにより、現代アメリカ文化を形成する中産階級的の市民意識や規範概念が、子どもに対する教訓のなかに脈々と受け継がれてきたものであることを確認することができる。児童文学およびコンダクト・ブックから、子どものための読み物のなかに描かれるジェンダー規範と教訓は、現代文化が映し出す子どもへの期待値とかけ離れたものではない。とりわけアメリカのコンダクト・ブックにおいては、アメリカ的な価値観をキリスト教のディスコースで子どもに伝えようとする意図が強く、これは現代アメリカの中産階級のモラルにも通じるものである。

現代英米で流通している少年および少女向けのガイドブック *The Boys' Book: How to be the Best at Everything* と *The Girls' Book: How to be the Best at Everything* は、さまざまな領域についての短いアドバイスで構成されている。男の子向けの記事には「ワニとの闘い方」というような、いつ役に立つのだろうというような荒唐無稽のものから、「電話帳を二つに引き裂く方法」という、ある意味では暴力的な力の発揮を促すような記事まであるのに対し、女の子の場合は「マニキュアの仕方」「編み物の仕方」といったオシャレと手芸・料理に関する記事が目立つ。先に出版された男の子向けの本は何度も増刷されているが、これらの本に見るジェンダーの差異も、いまだに伝統的な「男らしさ」「女らしさ」が社会的に強く意識されていることの証であるといえよう。

子どものための読み物を読み解くということは、社会が期待する子ども像を分析するということにほかならない。どのように子どもの理想像が描き出されたかを考察することは、その文化に内在する価値観をあぶり出すことでもある。19世紀におけるジェンダー規範の形成という観点から欧米の児童文学、コンダクト・ブック、そして現代の子どもたちが目にする児童文学やガイドブックを読解してきたが、文化的価値観、理想的市民像、19世紀の生活の実態、現代に通じる子

どもへの期待など分析することができた。

④ 研究の課題と発展

子どもがどのような読みものを与えられてきたのだろう、という問題意識は、性差をめぐる議論の不毛さから得たものである。女性が歴史的に不利な立場に置かれてきたことは明白な事実である。不利な立場とは、決定権から疎外され、権利から疎外され、その帰結として自由を行使することができないことであり、男性の意思決定に比較して、相対的に女性の思考や行動が制限されてきたことをいう。近代的な人権が広まり、個人が尊重される時代になっても、女性が権利から排除されてきたことは、各地でたくさんの女権拡張運動を起こした。にもかかわらず、女性の権利をめぐる議論は一進一退を繰り返しているかのような外観を呈するのである。

女性運動の主張はもとより一枚板ではない。たとえば、女性参政権の獲得をめぐるアメリカにおける議論は、「女性も人間として当然の権利である政治に参加する権利がある」という意見と「墮落した政治を是正するためには高い徳性をもつ女性の意見や判断が必要である」という意見とのせめぎ合いのなかで紆余曲折を経て、最終的には「女性特有の徳性を政治に取り入れよう」という主張が保守的な議会を説得するかたちで決着する。女性であることの特性が活かされる社会の実現を訴えることと、男女の差によって不平等が起こらない社会の構築を求めることは、本来矛盾することではないはずであるが、「女らしく生きたい」のか、「男並みに生きたいのか」という二者択一の問いに還元され、いつも両者の主張が対立するものとみなされてきた。

ジェンダーをめぐる議論の困難は、別のトラック(線路)で行われている主張がいつのまにかポイント制御のないままに混入してくることによって引き起こされてきたといえるだろう。道徳から解放されて生きている人間はいない。とするならば、ジェンダー規範の影響を受けない女性もいない。問題は、自由と権利の主張することが、ジェンダーの道徳的規範には反する姿勢を要求することだといえる。

人間は自由に生きるべきだ、という言説はいま政治的に正しい。しかし同時に、家族のために献身的に生きる女性像や、美しく装う魅力的な存在としての女性像もまた、メディアによって繰り返し描かれる。自分よりも家族のために、あるいは集団の中のサポート役

を喜んで引き受ける女性は、映画やドラマやニュース・ストーリーのなかで賞賛を受ける。華やかなモデルたちのグラビアは日常にあふれている。美を競い合うことは女性の意思によって行われていると言いつつ、美の基準を作り上げているものの正体は別のところにある。他者が期待する目線で自己を規定するところにミスコンテストは成立するといえる。

そのようなダブルバインド形成する一つの場所として、児童を対象とする文学や読み物を分析してみようというのが、本研究のねらいであった。幼少期に出会った物語の影響を計測することはもとより不可能であるとしても、逆に、幼児期から思春期にいたる過程で体験した価値観や感動から完全に解放された人格形成を行うことも不可能であるといえよう。子どもが読む物語は、子どもにどのような価値観をもって物事を判断するべきであるか、どのような行為や感情を社会が評価しているか、ということを示す文化的なメルクマールである。

次の研究の段階として、そのように形成されるジェンダー規範に抗うために繰り返された言説の分析に着手したいと考えている。まっさきに取りかかりたいのが、これまで日本ではまとまったかたちで研究成果が出されていないマーガレット・フラウである。難解な文体で知られるフラウの表的著作『19世紀の女性』の日本語翻訳を完成し、その論理と修辞を読み解く。次に、19世紀前半のアメリカ社会のジェンダーの不均衡に対するフラウの強い違和感が、後の編集者・ジャーナリストとしての業績にどのように反映されているかを分析する。キリスト教的道徳観、伝統的ジェンダー観、教育制度や法制度によって女性が知性の主流から排除されざるを得なかった時代に、フラウがさまざまな矛盾をかかえつつ獲得した言説を分析することを計画している。

マーガレット・フラウは19世紀のアメリカの文学、思想、フェミニズムを考えるうえで重要な位置を占めているにもかかわらず、その著作の日本語への翻訳も部分的なものを除いて出版されていない。超絶主義の研究のなかで触れられることはあっても、フラウに焦点を絞った日本語の研究書は筆者の知る限りない。文化史的重要性に反して、日本における研究が積極的に行われてこなかった人物の一人であるといえる。同時代の作家・思想家の著作が数多く日本語に翻訳され、日本の研究者、学生、読者に広く紹介されているのに対して、フラウに関する日本語媒体の研究資料は極端に少ないといえる。

フラーの著作の細部を分析しつつ、女性の知性と論理性が美德であるとは認められなかった時代に果敢な声を挙げたフラーのフェミニスト社会改革者としての全体像を浮かび上がらせたい。フラーのキャリア形成の特徴は、超絶主義という主流のなかでスタートしたこと、当時さかんに議論された女性参政権運動の活動家とは距離をおいたこと、また黒人奴隷制廃止運動の直接的な言論からも遠ざかっていたことであろう。女性参政権運動や黒人奴隷制廃止運動を牽引した女性活動家との比較をとおして、また超絶主義の男性知識人たちとの比較をとおして、フラーの思想や立場の独自性を探究したいと考えている。

アカデミズムも偏見から逃れているわけではない。「お上品な伝統」が生きていた時代に、弁舌のたつ鋭い知性を備えた女性の知性に向けられた偏見をひきはがし、フラーの思想的実態をあきらかにすることをめざす。

参考文献

- A Collection of Conduct Books for Girls and Boys in 19th Century America* (アメリカ 19 世紀の少女・少年のためのコンダクト・ブック) 本の友社
- Sylvia M. Vardell, *Children's Literature in Action*, Libraries Unlimited, 2008.
- Shelby A. Wolf, *Interpreting Literature with Children*, Lawrence Erlbaum Associates, 2004.
- Edward B. Fry ed., *The Reading Teacher's Book of Lists*, Jossy-Bass, 2006.
- Joanna Sullivan ed., *The Children's Literature Lover's Book of Lists*, Jossy-Bass, 2004.